HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	安武秀岳さんの世界
著者	大濱，徹也
引用	北海学園大学人文論集，36：11-12
発行日	2007-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

安武秀岳さんの世界

大　濵　徹　也

安武秀岳さんは，北海学園大学大学院文学研究科が英米文化専攻を設置するための招聘に応じ，本学に赴任され，学部・大学院における学生指導に力を尽くして下さいました。この間，スキーをこよなく楽しみ，北の冬を満喫されたと聞いております。

私は，安武さんが本学『人文論集』30号に発表された「アメリカ建国神話の国定化―日本における『メイフラワー誓約』研究史の再検討―」なる論文を読んだとき，北海道開拓のロマンとして説かれてきたピュウリタン神話に思いをはせました。かつ，この論文を書かしめた根には，「秀岳」名にこめられた本願寺に連なる寺の子として負わされた安武さんの宿業，仏法に名をかりて門徒衆に説き聞かせた「王法為本」の教説，覚如の本願寺とともに誕生した本願寺神学に対峙せんとする安武さんの宗門に寄せる目が読みとれるとの感を強くしました。

安武さんは，アメリカ建国神話に託して語られてきた日本のアメリカ史研究を問い質す作業をなし，日本のアメリカ研究の開拓者である高木八尺が〝our dread Sovereign Lord King〟の訳を「我等の統治者たる君主」となし，dreadがはぶかれていることを論じ，「恐るべき君主」と訳されるべきものであると指摘します。この問題提起は，天皇の尊称問題と重ね，戦後の象徴天皇制に道を開いたことに説きおよびます。かつConstitutionが「憲法」とされる問題をふまえ，日本の学問が強く国体神話に呪縛されている現状を問いかけています。

ここに展開する安武さんの論は，国体と政体を使い分けることで，万世一系の皇統神話にもとづく天皇の下にある日本の国家体制が存続してきた原器を鋭く衝くものです。思うに日本国家は，敗戦を終戦となし，いかな

る政体になろうとも，日の丸と君が代を宗とする国体が天皇を象徴とする国家神話に取りこまれることで現在も変わらぬ国のかたちが続いています。国体のありかたを凝視することなく，政体論として国家のかたちを位置づけんとした高木は，戦後改革を主導した田島道治，南原繁，矢内原忠雄らとともに，新渡戸稲造門下であり，内村鑑三につながる日露戦後世代が身につけていた「開かれた愛国心」にうながされて時代を駆けた知識人です。

アメリカ建国神話を問い質そうとする安武さんの思いは，私の目で読めば，日本の国家神話の根を撃たんとしているものにほかなりません。その営みには遠く本願寺神学に対する僧秀岳の信仰がなせる業ではないでしょうか。

歴史学は，学問が創生した神話を解体する秋，はじめて学問としての固有の場を確保しえます。一人の歴史研究者としての安武さんは，研究史の蓄積が堕ちこんだ隘路を断つべく，ともすれば「定説」の名の下に「神話化」された学説に刃をむけることで，己の場を築かれたようです。この作法は，自国史としてのアメリカ史を構築しようとするが故に「神話」を求めたがる動向に対峙し，外国史としてのアメリカ史を研究する者としてのある自負ともいえましょう。それだけに「神話」に加担する作業を撃ち，己が内なる闇に目をむけることで，その学問世界を構築されようとしてきたのではないでしょうか。まさに安武さんは，遊び心の底に，ある根源的問いかけをなしうるラディカルな心情を秘めた方ではないでしょうか。このバランス感覚が人間安武秀岳の魅力です。

短い歳月でしたが，安武さんとの出会いは芳醇な時間であり，知的刺激に富んだ一刻でした。ここに記して感謝する次第です。　（文学研究科長）